

# 世界のエリートはなぜ「美意識を」鍛えるのか？

山口周 著

単行本：257 ページ

出版：光文社

価格：760 円（税抜）

## はじめに

近年では、世界の有名グローバル企業が幹部候補をアートスクールへ参加させ、また知的プロフェッショナルの人々が勤務時間前の早朝に美術館へ足を運び、アートの勉強をしています。

ビジネスにおけるエリートである彼らが、一見関わりが希薄であるように思える「アート」を積極的に学ぼうとすることには、いったいどのような目的があるのでしょうか。大学院で美術を学んだ後コンサルティングの道に進んだ筆者と共に、この問いの答えを見つけにいきましょう。

## アートとサイエンス

“サイエンス：様々な情報を分析した結果、このような意思決定をしました

アート：なんとなく、フワッと、これがいいかなと思って意思決定しました”

アートとサイエンスの違いについて、筆者はこのように表現しています。サイエンスの世界では「言語化できること」や「再現性があること」が最重要視されます。しかし、世間的に言われる天才という存在の多くはアートな部分が強く、言語化や再現性を求めるのは難しいものです。

「自分は天才ではない」と語るイチロー選手を前者とし、その対比として長嶋茂雄氏の独特の表現方法を本書では取り上げています。

## クックパッド紛争

クックパッドの創業者である佐野氏は「豊かな食生活」に強い思い入れを持っていました。一方で、佐野氏から経営を任された穂田氏は特に食への思い入れはなく、経営サイエンスの専門家としてその地位に立ちました。

当初は 2 人がもつアートとサイエンスがバランスよく作用し、順調な経営状況が続いていましたが、アートの領域を適切に理解できる人は決して多くはありませんでした。株主や一般の消費者の期待に応えるためには、言葉による明確な説明が欠かせず、その煽りを受けて佐野氏を始めとするアート側が劣勢に追い込まれる事態に発展してしまっただけです。

ここにアートとサイエンスが同じ土俵の上で戦うことの難しさが表れています。

## アカウントビリティ

アカウントビリティとは業務や研究活動の内容について対外的に説明する責任のことを指します。

アカウントビリティというのは「天才」を否定するシステムだ

筆者はこのように考えており、先に述べたイチロー選手と長嶋氏の例がそれを裏付けています。しかし、企業においてアカウントビリティを一切排除することは現実的に不可能でしょう。論理的に物事を進めることの方が正確、かつ大多数の人から納得を得られるからです。

反面、アカウントビリティを過剰に重視してしまうと、天才の感性は弾き出され、論理的思考の中に埋もれてしまいます。アップルやグーグルは、アートとサイエンスを絶妙なバランスで保つことで、世の中をリードする新しい感性を具体的に世界へ発信し、今では世界的大企業へと成長しました。

今まで目を向けられてこなかったテーマが多様な知識と深い考察によって語られており、これからの時代に必要な感性を手に入れるきっかけになるおすすめの一冊です。